

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】石曾根 道子

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院 新領域創成科学研究科 国際協力学専

【研究題目】ザンビアの「資源の呪い」-銅のそばに暮らす人々の視点から-

【研究の目的】

豊かな天然資源に恵まれながらそれを経済発展にうまく活かせない国が数多くある。特にアフリカではその現象が顕著に見られる。資源が経済停滞や社会悪をもたらす負の現象は「資源の呪い」と呼ばれている。「資源の呪い」研究、言い換えると、天然資源が国自体の停滞を引き起こすメカニズムにおける研究は90年代以降、数多く行われてきた。だた、国を単位とした研究は欧米の研究者を中心に研究が進められている一方で、資源を産出している地域で実際に何が起こっているのかを捉えたコミュニティに着目した研究は数少ない。資源国が発展するにはもちろん経済成長や社会的安定などが必要である。だが、国としての持続的発展を考えるならば、国内で実際に何が起こっているのか、そして、国内での資源の分配はどうなっているのかについて検討することも重要であろう。そこで、本研究は、とりわけ資源の分配に着目しながら、資源開発と地域の人々はどういった関係にあるのかを捉えることを目的とした。

【研究の内容・方法】

具体的には、ザンビアの銅資源産出地域であるコッパー・ベルトにおける資源分配の構造を捉るために、以下の3点の問い合わせた。

1. 銅資源開発がどのような便益と負担(弊害)を生み出しているのか。
2. これらの便益や負担がどのように分配されているのか。
3. 資源開発が生み出す便益や負担の分配構造が、資源開発の始まった植民地時代(20-60年代)銅企業の国有時代(70-90年代)から民営化(2000年代)に至るまで、どう変容してきたのか。

これらの問い合わせを明らかにするために、定量的データ、公式のデータだけに重点をおくのではなく、現場に散らばっている定性的なデータ、流動的なデータを考察の素材として活かせるように一次データを収集に努めた。2008年度はザンビアの宗主国であったイギリスに赴き、アフリカ研究に力を入れている大学(ロンドン大学東洋アフリカ研究学院:the School of Oriental and African Studies, University of Londonなど)、ナショナル・アーカイブス、大英図書館などで、資源開発が始まった植民地時代から独立直後にいたるまでの歴史的な統計資料、公文書や政府財政関連資料の収集を行った。イギリスから帰国後は、イギリスで収集したデータの整理をするとともに、資源・環境ガバナンスに関する文献調査を中心に、環境ガバナンスの概念やフレームワークなどを検討しながら、現地調査に向けての準備(インタビューの構成、調査票の準備、現地アシスタントの調整など)を行った。その後、2009年3月中旬からザンビアの資源開発地域であるコッパー・ベルト州に入り込み、現地の社会環境状況のデータを集めるために地域住民200世帯余りのサンプリング調査を行い、政治経済状況を調査するために中央・地方政府やNGO、大学関係者へのインタビュー調査を行った。また、鉱業関連のアーカイブス(ZCCMアーカイブス)や統計局等で資料収集を行った。

【結論・考察】

現在、アーカイブスやフィールドワークで収集したデータの分析中であるため、最終的な結論を提示することは困難であるが、現段階で言及できることだけをここに述べたい。資源から生み出される利益(profit)は、資源価格の変動によって上下動する。しかし、資源による便益(benefit)は、政府がいかに資源政策を実行するか、鉱山会社がいかに鉱山を運営するかによって変化する。鉱山の便益は、政府のとる資源政策、そして時代によって異なることが分かった。最近では、以前に比べ、ザンビアの鉱業セクターの寄与度は減少傾向にあるにもかかわらず、未だに経済活動に直接的、間接的に大きな影響を及ぼすだけでなく、人々には鉱山はザンビアにとって必要不可欠なものとして認識されている。